

スギカミキリの被害拡大を防ぐための防除帯の研究（その2）

－スギ以外の樹種に対するスギカミキリの動き－

1 研究の背景

スギカミキリ（以下カミキリ）被害の拡大を防止するには、被害地と未被害地の間にスギの空白地帯を設けてカミキリの移動を制限し、空白地帯の前後で防除を行う「防除帯」の設置が有効と考えられる。空白地帯をスギ以外の樹種で構築した場合、放虫したカミキリがスギ以外の樹種に対してどのような動きをするのか明らかにするため、スギとスギ以外の樹種が接している林分においてモデル的にカミキリを放虫してその動きを把握する放虫調査を行った。

2 研究方法と結果

放虫調査は岩手町で行った。調査地にはスギ、アカマツ、純中国系クリ（以下クリ）の林分が存在する（図-1）。図-1中のスギA林、アカマツA林、クリ林を放虫調査林分とし、樹幹に紙製バンド（粘着剤が塗布されておらず、バンド内

で確認されたカミキリは別の立木に移動可能）を巻き、立木1本にカミキリを1頭づつ、各林分計47～48頭を放虫した。放虫後、毎日紙バンド内を観察して放虫調査林分内におけるカミキリの存在頭数を調査した。放虫調査林分の周囲の林分には粘着バンド（粘着剤が塗布されており、一度捕獲されると逃れられない）を巻き、放虫調査林分から移動してくるカミキリを捕獲した。

放虫調査林分におけるカミキリの存在頭数を図-2に示す。スギA林内では調査後17日目でもカミキリが確認されたのに対し、アカマツA林とクリ林では5日目には林内から消失した。消失した個体の移動先を図-3に示す。大部分は周囲のスギ林に移動した。1例だけクリ林からアカマツA林に移動した個体があったが、その個体も翌日には周囲のスギ林に移動した。

3 成果の活用

食樹（カミキリが産卵対象とし、幼虫が育つことのできる樹種）でないアカマツA林とクリ林に放虫した個体の多くは林内に留まることなく早期に消失した。これらの消失した個体の中には、放虫した林内で死亡したものや調査区域外に移動したものも含まれると考えられるが、多くのものは食樹である近隣のスギ林に移動していた。一方、食樹のスギ林から非食樹であるアカマツ林やクリ林にカミキリが移動することは無かった。

今回と前報（林業技術センター成果速報No.210）の結果から、カミキリはスギ林内での移動があまり活発ではないこと、更に、スギ以外の樹種の林分へ積極的に移動する可能性も低いことが判明し、スギ以外の樹種による「防除帯」の設置が有効であると考えられる。

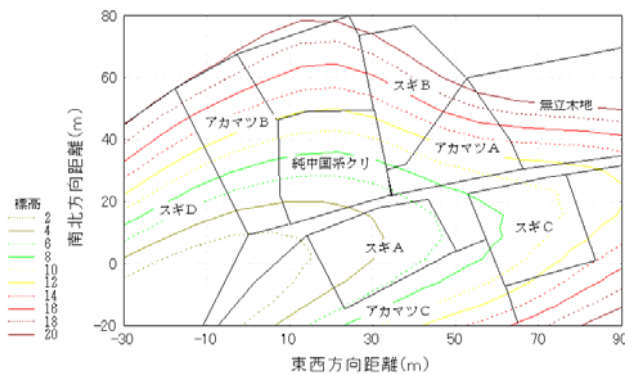


図-1 調査林分の配置

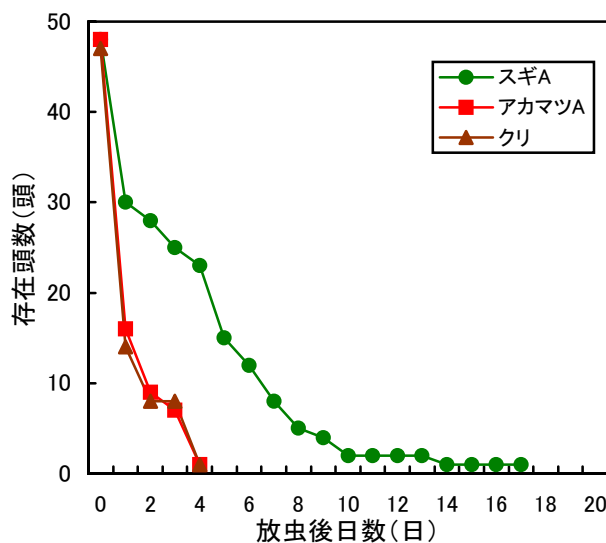


図-2 各林分に存在したカミキリの頭数

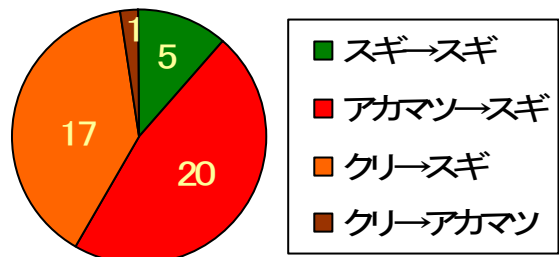


図-3 放虫した林分から消失したカミキリの移動先

(担当 森林資源部 主任専門研究員 高橋健太郎)

連絡先

028-3623 岩手県紫波郡矢巾町大字煙山第3地割560番地11
 岩手県林業技術センター
 ホームページアドレス <http://www.pref.iwate.jp/hp1017/>

TEL 019-697-1536
 FAX 019-697-1410